

2-2. 釧路湿原周辺の地質踏査・簡易水質分析調査結果

2-2-1. 調査目的

釧路湿原の保全・再生の問題を検討するためには、釧路湿原の現在の環境をできる限り自然の移り変わりの中で評価（相対化）する必要があると考えられる。これは、釧路湿原の今の姿が、人為的な影響によるものか、あるいは湿原の環境変遷の一過程であるのかを判断するためである（図 2-2-1）。その評価のためには、釧路湿原が形成時からどのような過程をたどって発達してきたかを知ることが求められる。

湿原の一般的な環境変遷は、陸化に向かう傾向にある。これは、湿原に注ぎ込む河川により供給される土砂が堆積することや、湿原自体が低層湿原から高層湿原に移行するというプロセスで起こる自然現象である。ただし、個々の湿原の発達は、周辺の地形・地質条件や気候条件などに大きく左右されるため、一様な過程をたどるとは限らない。釧路湿原は、今から約 3,000 年前にその原形が形成されたと考えられており（岡崎・鈴木、1973）、現在でも面積の約 80% が低層湿原によって占められている。この釧路湿原が、今までにどのような環境変遷をたどってきたかは明らかになっていない。

以上のこと踏まえ、本調査は、釧路湿原周辺の地質踏査を実施することにより、湿原形成過程の考察に必要な地質情報を収集することを目的として実施した。また、地質踏査と同時に、湿原を水収支解析のための基礎資料とする目的で湧水や河川水の簡易水質分析も実施した。

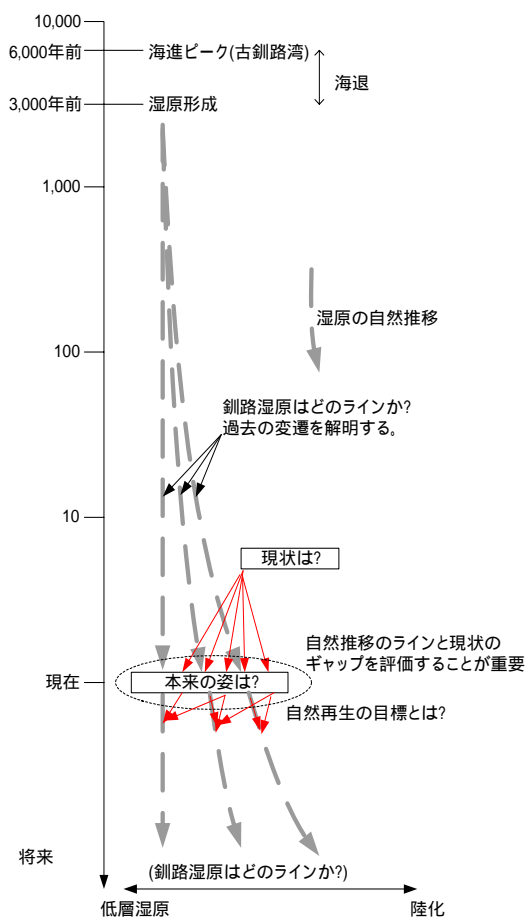


図 2-2-1 釧路湿原の評価のイメージ

2-2-2. 調査内容

(1) 調査箇所

釧路市、釧路町、標茶町、鶴居村にまたがる約 1,300km² の範囲（図 2-2-2）

(2) 業務内容及び数量

- 1) 地表地質踏査 約 1,300km² (縮尺 1:50,000)
- 2) 湧水点および河川水の簡易水質分析

(3) 調査方法

地質踏査は、釧路湿原周辺の広域の地質分布と地質構造を把握するため、調査の精度を 1/50,000 とした。調査範囲は、釧路湿原の集水域を基本としたが、北側は広大となるため釧路湿原周辺の地質構成が把握できる範囲とした。

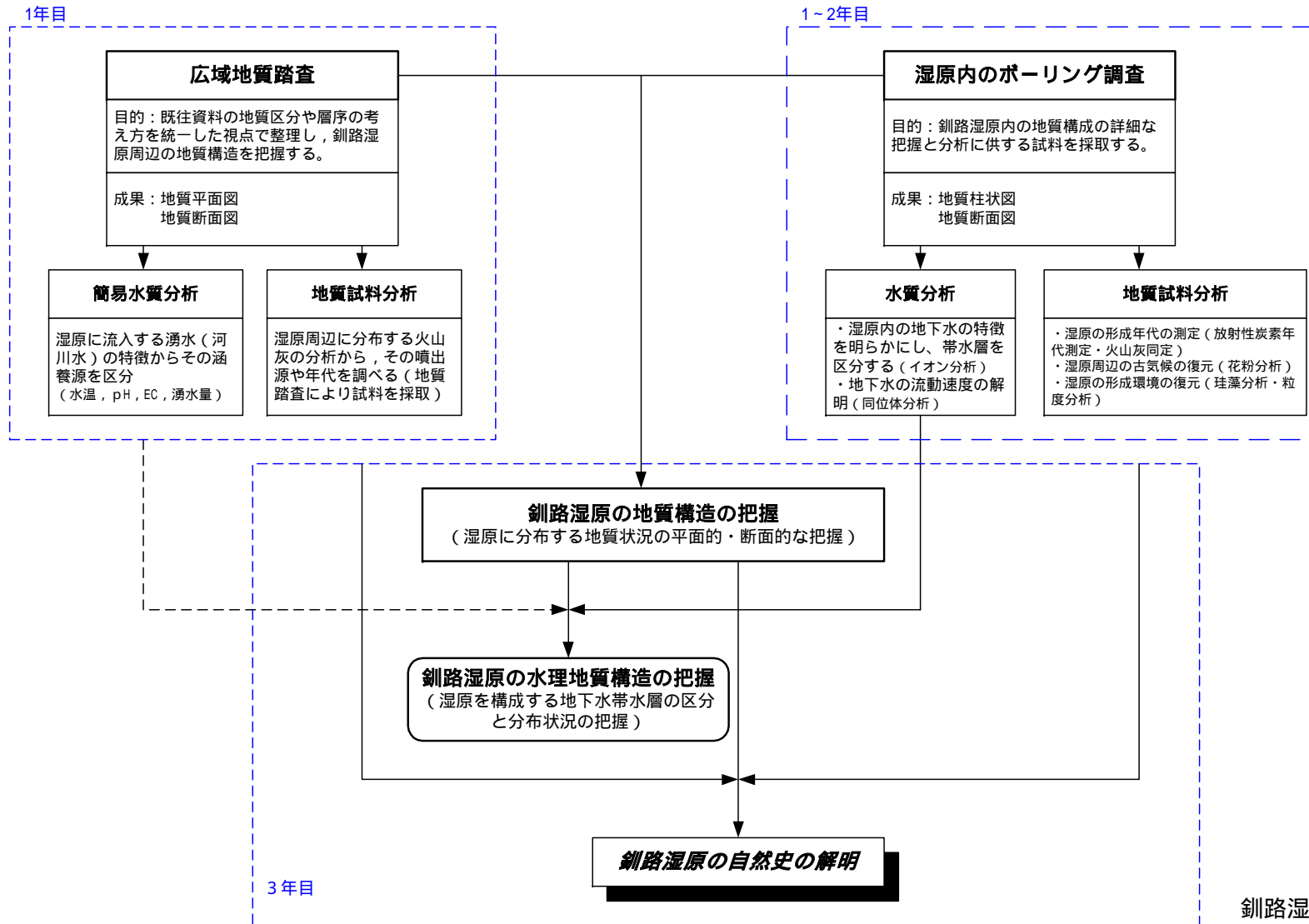
湧水点および河川水の簡易水質分析は、水温、pH、EC（電気伝導率）および湧水量を測定した。pH、EC の測定には、以下の機器を用いた。

PH - pH 比色測定器 CP-3(東洋製作所製)

EC - ポータブル電気伝導率・pH 計 WM-22EP(東亜ディーケーケー社製)

なお、地質踏査における露頭および湧水点の位置は GPS を用いて把握した。

2-2-3 . 調査フロー



釧路湿原の調査フロー